

異常気象続きの昨今、ニュースで「ゲリラ豪雨」という言葉をよく耳にする。うまく言ったものだと感じずる。日本人は、違う表情をみせる雨を経験すると、名前を付けずにはいられない人種かもしれない。「ゲリラ豪雨」は、情緒こそないが、その言葉を聞いただけで、情け容赦のない雨の勢いが、目の前にくつきりと見えるようだ。

日本人は、雨の降り方一つ一つの違いを見出して、名づけをしてきた。

―春雨、五月雨、村雨、氷雨、―

その言葉、一つでさまざまな情景が浮かび上がるのである。ものごとを細やかに観察する楽しみ方を知り、その細やかな違いを伝えたい相手がいた文化の表れである。

しかし、そのDNAを持つはずの私の息子は、情けないかな、薄ぼんやりとした情景しか伝える術を持たない人種である。

最近、息子の言葉遣いで、とても気になる表現がある。

「学校らへんで、事故があつたよ。」「八坂神社らへんで待ち合わせ。」

そのたび、ちよつと待て、と会話を制して、

「学校の門を出たところの交差点のことを言っているの?」「神社の中なの、外なの?」

と、再確認してしまうのだ。

この「らへん」を具体的な場所につけて使う表現は、今やかなり一般的になっているようだ。息子曰く、若手の小学校の先生だって使っているらしい。しかし、そのあいまいでつめの甘い表現に甚だ違和感を覚える私は、息子がこの「らへん」を使うたびに、ちくちくと異議を唱えるのだ。

私も度々使う「そこらへん」という言葉は、「其処ら(そこら)」と「辺(あたり・へん)」が合わさったもので、「ら」と「へん」が合体して一人歩きするのは、なんとも気持ち悪いのである。

しかし、このあいまいな表現は一度使うと、とても便利になるようだ。息子に誰とどこで遊ぶのかを聞くと、「二組の鈴木らへんの友達と、中央公園らへんでえつ。」

と、ランドセルを放り出して瞬く間にいなくなる。彼には「伝えた」という満足感はあるようだ。こちらも想像力を駆使して直訳すれば、「二組の鈴木君の仲の良いグループの何人かと、中央公園の中か、その近くの児童館で遊ぶ」ということなのだ。あいまいながら簡略化されたエコ言葉だ。

しかし、私は欲求不満だ。情景はぼやけたままでしか、伝わらない。

二十年来の友人と食事をするため、たびたび待ち合わせをすることがある。

「だいたい〇時頃、駅でね。着いたらメールするね。」

とメールで打ち合わせするだけでよい。また初めて行くお店で待ち合わせをするときも、お店のホームページからダウンロードする情報だけで、GPSが道案内までしてくれる。簡にして要を得ている。気付けば、携帯電話の便利さには頼りっぱなしの毎日だ。

携帯どこかポケベルさえ使わなかった世代の私たちは、昔は、待ち合わせをする時は、時間と場所をしつかり決め、遅刻など絶対しないように到着するため、緊張して行動したものだ。相手が遅れば、遅れている理由を想像しながら、ひたすらに待つ。遅れた言い訳をする方は納得してもらえない言い訳を、誠意をこめて披露する。待ち合わせの場所を説明するためには、ぱっと情景が浮かぶ言葉を駆使して相手に伝えようと努力していた。相手が知りたい情報は何かを予測しながら、言葉を選ぶ。そんな丁寧な言葉を私たちはたくさん受け継いできているはずであった。

日本語には「言葉が足りない」という表現がある。まさに、わが息子のように、微にいり細を穿った説明ができないことを言う。しかし現代社会では、必要な情報は、モバイルが代わりに伝えてくれる。実際、そちらの方が、より客観的な情報を確実に素早く伝えてくれる。しかし、情報の伝達をモバイルに明け渡した人間は、日々の生活の会話すら、ぼやけたあいまいな言葉しか使えずに、「きつと、伝わっただろう。」と一人、満足しているのかもしれない。

外国の方からは非難されることもあるが、日本語の美しさを、直接的な物言いをしない「あいまいの美」とする見方がある。しかし、そのあいまいさは、言葉足らずの無責任さやいい加減さの現れではなく、相手を傷つけまいとしてきた先人たちのやさしさである。

—慮る、推し量る、思いやる—

心の中の全てを相手にぶつけることを避け、相手の気持ちを考えてみる。心の機微を示すこれらの言葉は情緒までも言葉に映し出す美しい日本語だ。白黒はつきりと言わないその態度は、「あいまいな日本人」と言われる所以かもしれないが、その言葉は日本人が大切にしてきた人と人の関係の深さまでをも表し、私の大好きな言葉である。

しかし、今の日本には息子の「らへん」にみられるように、「直接的な物言いをしない、あいまいさ」という部分だけ、なぜか受け継がれているように感じる。相手の気持ちを慮って、相手に必要な情報を提供する、という核心がすつぽりと抜けてしまった。

東京に住まう我が家には九州の姑から定期的に電話がくる。姑は必ず、

「そっちの天気はどうね？ 雨は降ってる？」

と聞く。新婚の頃はこの姑の形ばかりに思える定期的な電話に辟易としていた。しかし、十数年がたち、私も子供を持つ身になった。親心がわかるようになって、電話の質問が違って聞こえてくる。関東と九州では天候も差が大きい。用事がなくとも、環境の違う地域で家族がどのように暮らしているかを案じる質問なのだ。単に、晴れ、曇り、雨、寒い、暑い、だけではなく、肌を感じるこちらの空気を伝えたい。そんな時が、日本語のありがたみを感じるときだ。

—花曇、梅雨寒、小春日和、入道雲、いわし雲—

これらの言葉には、あいまいさの微塵もない。その言葉を聞いただけで、ぱっと情景が浮かび上がるだけではなく、空気の感触までも思い起こすことができる。電話のこちらとあちらで共有できるこの感覚は、話の枝葉も広げてくれる力を持つ。この細やかに状況を伝える語彙をたくさんもっていることが、日本語のすばらしさであり、日本人の美德である。

この日本人の美德を言葉足らずの息子に伝えていくためには、どうしたものか。伝えるべき言葉をゆっくりと模索していこう。